街道をゆく 十七

司馬遼太郎

街道をゆく 十七

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十七年三月五日　第一刷発行

街道をゆく　十七

定価　一三〇〇円

著者　司馬遼太郎
発行者　初山有恒
印刷所　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社

〒104
東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集　図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎　一九八二年

0326―254957―0042
Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

街道をゆく　十七

本書には「週刊朝日」昭和五十五年四月四日号・連載第四百四十一回から、十二月五日号・第四百七十回分までを収録。

目次

島原・天草の諸道
松倉重政　7
城をつくる　21
がんまつ　35
サン・フェリペ号の失言　49
沖田畷の合戦　63

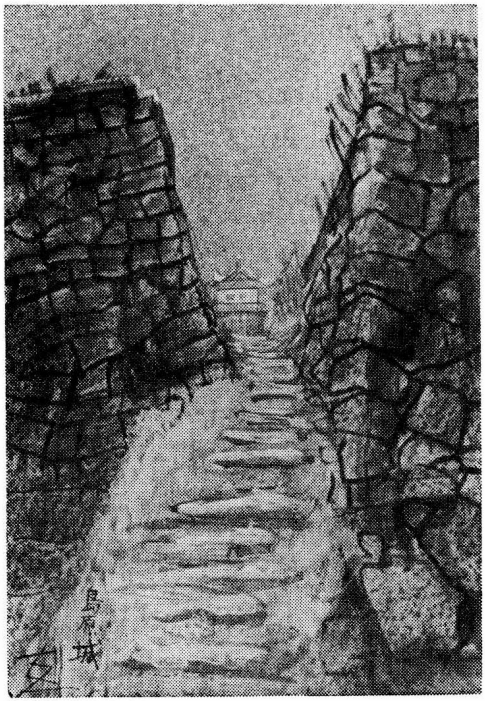
明暗 77
侍と百姓 91
南目へ 105
北有馬 119
口之津の蜂起 133
原城へ 147
板倉 159
城のひとびと 173
本丸の海 185
名残りの口之津 197

加津佐コレジヨ　211
天草諸島　225
鬼　池　239
本　渡　253
木山弾正　265
国衆たち　279
延慶寺の梅　293
富岡城趾へ　307
四　郎　殿　321
サンチャゴ　335

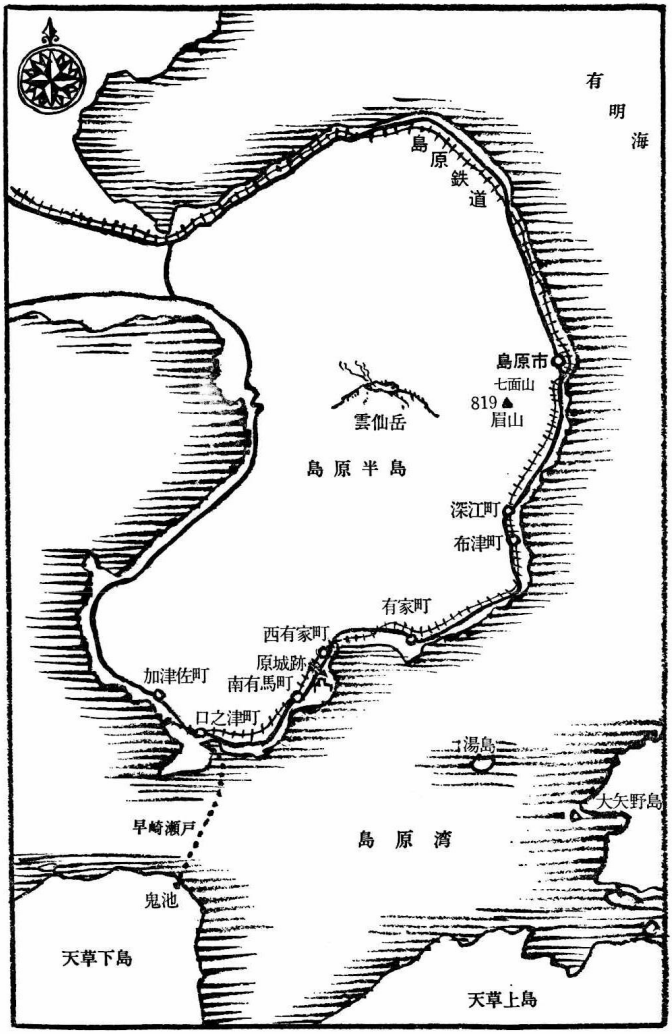
海上の城 347
天草灘 361
上田宜珍 375
大江天主堂 389
崎津 403

題字＝棟方志功
え＝須田剋太
装幀＝原　弘
地図＝熊谷博人

松倉重政



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c


有明海
島原鉄道
島原市
七面山
819▲
眉山
雲仙岳
島原半島
深江町
布津町
有家町
西有家町
原城跡
南有馬町
加津佐町
口之津町
湯島
大矢野島
早崎瀬戸
島原湾
鬼池
天草下島
天草上島

日本史のなかで、松倉重政という人物ほど忌(い)むべき存在はすくない。

といって、ばけものというほどの男でもなく、類型はわれわれのまわりにもいる。だが重政の場合、歴史の過熱点にまぎれこみ、その人間にふさわしく大鉞(おおまさかり)の柄をにぎったといえるだけかもしれず、それだけにかえって気味がわるい。

重政は大和にうまれ、豊臣末期に人となった。外様ながら徳川家康に気に入られて小(こ)大名にとりたてられ、多少の武功をたてた。抜擢されて肥前高来郡(たかきこおり)（島原半島一円）の領主になり、その愚かな息子とともに島原ノ乱をひきおこす原因をつくるにいたる。

重政のことを考える前に、戦国期の大和という土地を見ておかねばならない。古代、上代は措(お)く。平安期以後、戦国末期までのながい時間のなかで、ここは政治的に特異な地帯であった。

中世日本史においては、他地方の平均的な発展とは別趣のかたちで存在したといえるほどであった。王朝のころ、公家(くげ)の力も直接には及ばなかった。

興福寺という日本一の強大な寺院領主によってあらかたおさめられていたといえる。興福寺の僧（学侶(がくりょ)）たちがいわば王朝期の公家のようにしてこの地に君臨していた。僧に、為政者がもつ政治的倫理感を望むのはむりで、かれらは租税さえ取りたてられてくればそれでよかった。幸い、大和は農業に適し、天災はすくなく、自然、人情は穏和で、治めるのに楽な土地で

はあった。

そのような寺領において、年貢の取立など行政の実務を代行する者がいる。

「治める」

というのは、要するに年貢の取立と治安維持だけのことである。

そういう仕事は、下司（沙汰人、荘官）がやるべきもので、僧服を着た公家貴族である興福寺の僧が手をよごすべきものではない。

下司どもは、農村における力ある者がこれをつとめる。滑稽なことに頭をまるめて僧形をしている。叡山における僧兵をおもえばよい。

こういうことから、大和では武士というものが遅く発生した。むろん武士的倫理の発達も遅れた。武士の勃興は平安末期で、それが政権をとるのが十三世紀だが、大和の場合、四捨五入して、その圏外にあった。

大和にあっては、室町期、十五世紀ごろになって、ようやく前記の僧形の俗人が武士になってゆくのである。それでも大和武士にはどこか興福寺の衆徒のにおいか、春日明神の神人のにおいがあった。

室町末期にかれらが興福寺領を蚕食して力を得、なかでも筒井氏が大きく勢力を伸ばした。代々、僧まがいに法印を称し、僧名を名乗った。このあたりいかにも大和武士である。

織田氏のころの筒井氏の当主は、「洞ケ峠」で有名な陽舜房順慶である。

この人物が大和武士としては、はじめて世間に名を知られた人といえるかもしれない。

僧形の順慶はその姿のまま信長の大名になり、信長の命で明智光秀と姻戚関係を持った。

天正十年（一五八二）、信長は本能寺で光秀に討たれた。当時、秀吉は播州にあり、軍を大返しに返して山城の山崎で光秀軍と対戦した。このとき、戦場にちかい大和にいる筒井順慶へ「戦場に参同せよ」という使者を走らせた。同時に光秀からも誘いの使いが順慶のもとにきた。

順慶は大軍をひきい、山崎の戦場を見おろす石清水八幡の山——洞ケ峠——まできたが、しかしそれ以上は動かなかった。眼下の戦場を見つつ勝敗の決するまで待ち、やがて秀吉軍が勝ったとみてからすばやく山を降り、秀吉方の織田三七の陣へ伺候して大いに戦勝を祝賀した。順慶は日本語の語彙を豊かにすることに貢献した。こんにち、この種の倫理行為について「洞ケ峠をきめこむ」という言葉がなければ不便である。

当時、順慶は三十半ばで、老獪といえるほどに苔のついた年齢でもない。それに、代々の僧兵貴族の出だけに、卑賤から身をおこしたたたかさというものもべつに持っていなかった。

ただ光秀から大きな利をほのめかされていた。

「味方に参ずれば、大和一国はもとより、河内、紀州をあたえる」

というもので、まことに大利といっていい。

——ぜひ明智どのにお味方なされますように。

という意見が、配下に多かったという。ただ明智方に参ずる大名がすくないという情報が入ったときに、迷った。

このとき、老臣の松倉右近という者がすすみ出、

——如かず、しばらく軍を城州（山城）八幡山に懸け、天下の事変を観、以って去就を決せんには。

と、すすめたという。松倉姓が史料に登場するのは、洞ケ峠の提案者としてである。

この提案者が、後年、島原に就封する松倉重政の父であった。

戦国期は権謀の時代ではあったが、同時に、生と運をつねに賭けている時代のるつぼのなかで、潔さという倫理意識が陶冶された時代でもあった。ただ大和だけが戦国の時代的気質からすこし離れている。中世以来の興福寺の長袖者的気分と、その興福寺領を姑息に蚕食した衆徒たちによってできあがった世界だけに、よくいえば旧家の大旦那らしくまったりしていた。「洞ケ峠」というのが倫理的にいかに不格好なものであるかについては、その家来たちもおそらくは鈍感だったのであろう。

あるいはこの時期、順慶はすでに病気だったのではないか。かれは大和に帰陣してほどなく

胃を病み、三十六歳で消えるように死んだ。順慶には子がなかった。姉の子である養子定次が家督を嗣いだ。

秀吉は、大和にその弟秀長（大和大納言）を置いた。このため筒井家を伊賀に移し、二十万石をあたえた。

秀吉は古くからの有力大名を弱体化するためか、かれらの家老をひきぬいて豊臣家の直参にするということをよくやった。前記松倉右近もそのでんで秀吉の旗本になったかと思われる。もっとも実際には豊臣秀長に属するかたちだったかもしれないが。

筒井家には、先代順慶のころから、

「三老」

とよばれる家老がいた。

森志摩守、島左近、それに松倉右近の三人で、森氏についてはその後がよくわからない。島左近は、著名である。かれは筒井定次が嬖臣を愛したために退転し、牢人になった。その後、石田三成が大名になったとき、三顧の礼をつくして家老として招聘した。島左近は人柄が重厚で進退が明快であり、興福寺的なにおいはほとんど見られない。

松倉氏の祖は、新井白石の『藩翰譜』などによると、そのむかし、越中下新川郡松倉（魚津

の南）にいて、室町後期の嘉吉年中（一四四一～一四四四）に大和に流れてきた。添上郡橋田というところに住んだという。当時、越中のような遠国から大和に流れてくるというのはよほどの事情があったのだろうが、くわしいことはわからない。

のち、筒井家に仕えた。

数代をへて前記松倉右近（名を一書に信重とある）になる。右近は、筒井定次の伊賀移封のあとほどなく死んだらしい。

その子松倉重政が、嗣ぐ。重政は豊臣期においては無名にちかかった。

大和において三千石ほどを領していたらしいが、その封地は一説には越智村、一説には五条付近だという。いずれにしても、その存在はごく碌々としたものであったはずである。

この男が暴かに世間に躍り出てくるのは、秀吉の死からであった。

乱世がきた、とおもったのだろうか。こんな大和の片田舎にいても仕方がない、というあせりがあったかと思われる。べつに焦らねばならぬ事情があったわけではなく、そういう性格だったのであろう。

家康は秀吉の死後、豊臣家の大老という資格で、上方にいた。その野心はたれの目にも露わで、三成を筆頭とする反家康派がいつ起つかということが世間でひそかに取沙汰されていた。慶長五年（一六〇〇）家康は会津の上杉景勝を討つという名目のもとに豊臣系大名を組織し、か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c